

保育科・専攻科保育専攻における授業改善と修了論文指導

岩井 勇 児

永らく教員養成の教職科目を担当してきたので、その延長線上で授業ができると思って本学に赴任したのだが、実際に授業を担当すると、あれこれ戸惑うことが多かった。本学を去るにあたって、本学で試行錯誤した授業実践について、まとめて報告しておきたい。

(1) 保育科「教育心理学」の授業改善

本学に赴任するまで、ある短大の幼児教育科の1年生前期の発達児童学を15年ほど担当してきた。キリスト教主義の学校だから、その短大よりは期待できると思っていたら、かなり違っていた。

1) 受講態度の改善

①基本的マナーの訓練

赴任する前年度に非常勤講師として、2年生後期の教育心理学を担当した。学生の一部には、遅刻する、テキストは忘れる、テキストの黙読の指示をしても知らん顔、おしゃべりはする、静かにさせると机に顔を伏せて居眠りする、やたらとトイレに行く等々ひどい受講態度の者がおり、びっくりした。

専任教員として赴任するにあたって、短大の学生むきに、これまでのいくつかの著作をパソコンで再編集して、見出しをたくさんつけ、図表、イラスト、写真など沢山入れたテキスト、『子どもと喜び悲しむ心理学』(1998a)を作成し使用した。授業開始とともに、その日にやる章について、学生に黙読させた。ところが、指示してもなかなかテキストを机に出さない。机間巡視をすると、私の進行につれて、逆将棋倒しのように、テキストを取り出す始末である。指定したページを開いていても、一向に読まない学生もかなりいた。

一番ショックだったのはトイレのことだった。授業中、学生がニコニコして手を挙げて、大きな声で「先生トイレに行ってきたいいですか」というので、そういうことは黙って静かに行って来い、

声を出して授業を妨害するな、と言ったところ、次の時間、入れ替わり立ち替わり学生がトイレに行きだした。びっくりして、叱ると、授業後数人がやってきて、「先生は、この前トイレに黙って行っていいと言ったのに、今日はいけないと言うのはおかしい」といいだした。いろいろ話していると、ある学生が、「授業中トイレは禁止ということですか」といったので、あきれた。

授業中にトイレに行くことは恥ずかしいことだが、それでもトイレに行くのは、よほどの事で、滅多にないことだから、黙って行って来い、といったつもりだった。学生たちは、授業中トイレに行くことは、悪いことでも恥ずかしいことでもなく、高校時代から当然のこととしていたのだ。

トイレの件の学生たちの発言、あるいは、これまでの調査結果(岩井 1998b、1999)から想像すると、こうした学生たちは、遅刻、おしゃべり、居眠り等についても「授業中にやってはいけない行為」と思っていないようである。

私は、保育科の教育心理学の授業は、子どものしつけのための基礎学だと位置づけている。だから、私の授業は、まず学生のしつけから始めた。授業中やってはいけない行為は、いろいろな手で徹底的に禁止した。

教育心理学を、まだフレッシュな1年生前期に開講してから、学生たちは、それに応えて、よい雰囲気での授業ができるようになった。

②学ぶ態度の教育

学生の受講態度や、これまでに実施した調査結果(岩井 2000、2001、2002)からみると、学生たちは、学生として「学ぶ」ことよりも、保育者として「援助する」ほうが好きである。学校への要望を聞くと、「理論よりも、実践的、実技的で、すぐに役立つ授業を多くして欲しい」といったことが出てくる。自分が成長するために学ぶ姿勢はなく、保育者になったときそのまま使えることを

仕入れておこう、という魂胆である。

それに対して、「今、学生として学ぶことができない学生は、保育者になっても子どもを指導することができない」ことを、繰り返し学生に伝えている。

授業における教師と学生の相互作用は、教育の本質的場面であり、学生の講義を聴く反応がない限り、教師が一人で頑張っても授業は成り立たない。学生時代に、学ぶ側としてこの教育的相互作用を体験しないで、どうして保育者と子どもの相互作用を活かす保育者になれるか、ということを受講態度のしつけの基本として伝えて続けている。

なかなか伝わらないが、昨年度に「授業は、学習意欲をだす学生と教師の相互作用で成り立つと実感した。」と感想を書いてくれた学生が現れた。

③ともかく勉強させる

食欲によって食べる、面白いから知ろうとする、といった発達の基本を身につけていないためか、学生たちは授業内容に知的興味や関心を示さず、試験に何を書けばよいか、成績や評価ばかり気にする。だから、最低の勉強しかしない。

私の調査（岩井 2003）では、1週間当たりの自宅学習時間は、0時間が32%、1時間以内が57%に対して、1週間当たり10時間以上アルバイトをしているのは61%である。授業時間以外は、アルバイトしかしない学生が多数派なのだ。

試験ができなくても、再試験料を払って適当にレポートを書けば単位はもらえる、となると、唯一の学習時間である授業中でも、授業を聞こうとしない。期末試験の試験勉強もしない。

そこで、学力の低いと評判の学年の期末試験でひどい成績の学生数名を不合格にした。予告して実行したのだが、本当に落とすとは思わなかったと、学内の評判は悪かった。しかし、再履修する学生と一緒に受講する経験をした、次の学年の学生から、期末試験に対する態度が見違えるほどよくなった。

評価しか気にしない学生を逆手にとるのは、不本意であるが、期末試験の試験勉強をさせる効果はあった。勉強すれば、何かが少しは残ると思う。

2) 小テストによる授業改善

①小テスト方式の導入

本学に赴任して2年目の5月、突如めまいで倒れた。2週間ほど休んで、杖をつきフラフラ歩きながら、なんとか少人数の専攻科の授業は続けることができた。後期の教育心理学の授業をどうするか、退職するか、色々悩んだが、できる限り工夫してやってみることにした。

その頃、大きな声を出したら、クルクルしてひっくり返りそうになる状態で、授業で90分しゃべり続けることは、かなり困難であった。そこで考えたのが、小テスト方式である。

従来も最初にテキストの黙読をさせていたが、これを30分ほどに長くして、中程で30分ていど解説をして、あとの30分で小テストを実施した。小テストは、授業でやったところから1問ないし2問出題した。A 5判に問題を印刷し、回答欄には罫線を引いた。小テストは、3段階で採点し、A Bは無印、Cは△、Dは×をつけて次の時間の黙読の時間に、巡視しながら、個別に返却し、その後、全体に対して講評をした。従って、座席は番号順に固定した。

体調の悪いときに、毎回200枚近い小テストの採点はかなり負担になったが、授業以外の雑用はすべて免除してもらったし、その後特任教員になったので、何とかこなすことができた。

この方式は、私の体調がすっかりしない割には、学生の教育に案外よかったので、講評や解説の時間は多少変えたが、基本的には、その後今日まで継続してきた。

②小テスト方式による受講態度の改善

小テスト方式にしてから、受講態度がかなり改善された。黙読の時間、テキストは広げているが読まずにボケーツとしている学生は、かなり少なくなった。テキストも忘れなくなった。解説や講評も、今までよりはよく聴くようになった。

③文字・文章の書き方の訓練

小テストの解答を見ると、小学校で学習する文字や文章の書き方の基本ができていない学生がかなりいる。年度によって流行があるが、偏と旁が離れていたり大きさがアンバランスになるなど、読

みにくい妙な文字を書く。罫線を引いてあるのに、行の前後あるいは中間に空白をやたらに作って揃えない。改行のとき一字空けない。といったことは、全体に注意するとともに、改善がみられないときには、返却時に個別に厳しく注意した。

文章は相手に伝えるために分かりやすく書くものだ、と繰り返し、注意し続けた。

④自分の文体で書く指導

小テストの問題は、テキスト及び私の解説をきいて、それなりにまとめて書くことが必要だ。しかし、テキストを読んで、それを要約できる学生は、少数派である。多くの学生は、テキストの該当部分を丸写しに抜き書きするのがやっとなのである。なかには、全局的はずれの部分を写す者もいる。

そこで、テキストの文章は、教師である私が学生に対して書いていたものである、小テストの解答は、学生が教師に対して書く文章であるから、その文章を丸写しにすると、学生が教師に説教するような、おかしなことになる、写すにしても、自分の文章にして書け、と指導するのだが、伝わらない。

「先生のテキストは、読みやすくわかりやすかったけど、まとめることができなかった」という学生の感想がかなりあったが、読みやすくわかりやすいのは、導入等で使った事例などの部分で、事例を使って伝えたい本論は理解できないのだ。

だから、この辺りのことらしいという見当で解答している。それで、自分の文体で書けないのだ。

⑤自己評価力の指導

ある学生から、「講評を聴いても答が分からないから、答を教えて欲しい」という要望があった。講評で正答を解説してきたつもりなので、びっくりして、学生にいろいろ聞いてみた。

まず、全体に対して話しているとき、自分のこととして聴く耳を持たない学生がいることだ。

また、自分の書いた文章のどこをどう直したら正答になるか、自分で判断できない。つまり、自己評価力がない。それは、内容を理解しようとしなくて、答だけを覚えるのが勉強だ、という習慣が身について離れないからだ。だから、丸暗記できる正答を文章で欲しいのだ。

内容を分らずに解答を覚えたって、頭はよくならないことを、知能や学習に関する授業で繰り返してきても、この調子なのだ。

小テスト方式を通して、多少とも、自分の行為に対する自己評価力を養うことができないか、と淡い願いを抱いたが、前途ほど遠し、である。

⑥学生の達成感

体調不良による窮余の策として始めた小テスト方式であったが、学生にとっては、受け身で講義を聴く時間が短く、自分で読んで、自分で解答を書く作業をする時間が多かったのは、案外よかったのかもしれない。授業評価では、学生はかなり好意的であった。

学生から見ると、かなり厳しい授業のようだが、真面目に勉強しようとする学生にとって、私語や居眠り一つない、シーンとした緊張感のある授業は、大変好評であった。また、最初は消極的で、試験を丸暗記で乗り切るような学生でも、やらなければ通らないことを経験して、期末試験に合格すると、「私たち、やったもんね」と、それなりにやった気になったようである。

1年生前期で教育心理学を受講した学生に、2年生後期で保育職論の授業をしているが、かつての2年生後期の学生とは、まるっきり違う受講態度である。最初から、よい雰囲気での授業をすることができるのだ。

小テスト方式の教育心理学の授業は、一方通行で講義をしていたときよりも、教師と学生が緊張した授業時間を共有した、という体験を残したように思う。抽象的知識の苦手な学生たちに、授業内容の伝達は必ずしも十分といえないかもしれない。それでも、この共有経験は、教育あるいは子どもを育てるといふことは何かを伝えたいと思う。

(2) 保育専攻「教育心理学研究」の授業改善

1) 学生の資質に合わせて試行錯誤

保育科の講義のように、100名近い人数で授業するのに対して、保育専攻の学生数は、学年により異なっていたが、2～10名で、少人数教育ができる。少人数教育は学生の個別指導ができる良さはあるが、個々の学生の影響を直接受けること

にもなり、授業がやりにくいことがあった。

保育専攻学生のなかで、学内から進学し、私の教育心理学の授業を受講した学生の成績を調べてみると、ABC及びDの分布は、保育科の学生の分布よりはやや低く、成績の良い学生が進学しているとはいえなかった。

進学した目的は、もう少し勉強して学士号の資格をとりたい、公立の幼稚園・保育園に入りたい、などであるが、モラトリアム的な学生も進学している。また、現職から戻ってきた学生のなかには、進学目標のはっきりしている者もいたが、職場への不応から脱皮を求めてきた、という感じの者もいた。

したがって、保育専攻の各学年は、人格的にも能力的にもいろいろな学生の組み合わせで構成されており、学年によって雰囲気はかなり違った。だから、毎年あれこれ授業の工夫をした。

①基礎学力の欠如

短大卒の学生として、当然知っていると思って、それを基礎に授業の準備をしても、予定変更になることがあった。

たとえば、赴任した年度、教育調査統計法研究の授業で、関連の話を回帰直線から始めようと思って、 $y=ax+c$ という式は直線を表すことぐらいは知っているだろうね、といったところ、知りません、という学生がいて、あわてた。

こうした学生に関連の説明を回帰直線から始めることは無理であった。関連の説明は、情報処理室ができてEXCELで直感的な図解説明にとどめるまで、授業では扱えなかった。

②テキストの要約と感想が書けない

初年度は、保育科で教育心理学を受講したけど、もう一度復習したい、という学生の要望があったので、保育科で使用しているテキスト『子どもと喜び悲しむ心理学』のなかからいくつかの章を学生に割り当てて、発表させる授業をやってみた。

授業を始めてみると、各章の要点を学生がまとめて紹介する、という作業はできなかった。文字を拾い読みしているだけで、内容を理解していなかった。テキストにでてくる心理学用語について質問しても、ほとんど答えられない状態であった。

レポートを読むと、学力だけでなく、文章を書く訓練から必要だ、という感じがした。

そこで、次の学年から私が愛知教育大学で、教職選択科目として授業してきた内容をまとめた、『教師の心理』(1983)をテキストにして講義をして、毎回そのときやった内容をまとめて書き、それに感想を加えるというレポートを提出させた。私は、それにコメントを書き文章を添削して返却する、という作業をした。

このテキストは、小中学校教員について書いたものであるが、できるだけ保育者にも共通する問題の章を取り上げて講義をした。感想は幼児教育との関連で書くのが望ましいとした。レポートは、学生にもよるが、おおむね次のような状態であった。

私が授業で扱ったこと全体を要領よく要約できる学生はごくわずかであった。テキストの一部分を抜き書きして並べるだけで、しかもどこがテキストの文章で、どこが自分の文章か、区別が分かるように書けない者もかなりいた。

感想については、私の講義の内容やテキストの内容とは無関係に、「保育者は子どもの目線に立って、子どもの心をわかってあげなければいけません」といった調子の、これまで教えられた保育者の建前を羅列するようなものが目立った。

レポート返却の度に、細かく注意した。それによって、だんだん良くなっていく学生もいたが、こちらのコメントが伝わらないままに終わってしまう学生もいた。

小中学校の教師と子ども、教師と親、教師同士などの例から、幼児教育や保育の場における保育者と子どもをめぐる人間関係の問題を中心に講義してきたのだが、学生のなかには、小中学校の教師の例から、保育者の例を類推することができない感じのする者がいた。

それができないのは、抽象的思考力が弱いからだ。いくら本を読んでも、本の言葉を現実の世界を抽象したものとして理解できず、本の表現を現実とは無関係に、表面的言葉として知るだけだ。だから、本を理解して読んでいないのだ。

③子どもの発達と学習の本質に関心がない

私がテキストとして使用したのは、すべて私の

著作である。そこでは直接幼稚園や保育所を扱っていないが、子どもの発達と学習に関しては、多人数で書いた寄せ集めの教科書類よりは、はるかに分かりやすく読みやすく、私なりに一貫性がある内容だと思っている。それなのに、いまひとつ学生に伝わらないのは、なぜだろうか。

たとえば、ある学年の教育心理学特別演習で、一般向きの『児童心理』『別冊PHP』『教育心理』などの雑誌に載せた、子どもの発達や学習をめぐる親子関係、教師子ども関係などを扱ったいくつかの論文を読ませて、学生に討論させたことがある。学生たちが話題にするのは、その論文の本論ではない。導入等にあげた事例の部分で、自分たちも似たような経験をしたことを、それぞれ私にこうだったあだったと言いついて、終わりなのだ。そこから、何も学ぼうとしないのだ。子どもの発達や学習の本質にかかわるような話題にまでとても到達しないのだ。

私が使うテキストは、どこをとっても子どもの発達と学習の本質に触れるように書いてあるし、子どもと大人(親・教師)との関係についても具体的に書いてある。しかし、学生は子どもの発達や学習の筋道を知りたいと思わず、子どもの心の動きに関心が無く、自分たちが保育者としてどう振る舞うかしか、関心がないようだ。だから、私の本が読めないのである。

2) 子どもの観察による授業改善

①子どもの観察記録の訓練

修了論文を書くための基礎として、本を読んで要約して感想を書く、という訓練をしてみたが、こうした訓練をしても、子どもの心を知る訓練にならない、という感じを持った。

そこで考えたのが、子どもの観察記録を書く訓練である。少子化時代、学生たちの子ども経験は、私の育った頃に比べると圧倒的に少ない。だから、日常生活のなかで、子どもが育っていく様子知らない。実習経験では、子どもの動きよりも保育者として振る舞うことに関心が向いてしまう。だから、子どもに関心がなく、子どもを観察する力は育っていないのだ。

そこで、自分の身の回りで目に付く子どもの行動を観察して、それを観察記録に纏めて、感想を

加えて提出する。A4で40字×40行1枚を毎週提出して、授業では、全員のコピーを作り、それぞれが発表して、学生同士の質疑のあと、私がコメントする、という形式で授業を進めた。

私の教育心理学では、最初にS-O-Rについて、ていねいに説明し、その後の授業内容についても、なるべくこれに沿った説明をしている。この授業でも、最初に教育心理学のテキストに戻って、S-O-Rについて再度説明し、これに沿って観察記録をまとめることを求めている。

子どもの行動はRであり、これについては、できるだけ客観的に事実をていねいに記述すること。子どもの行動を引き起こしたと思われる周りの状況がSであり、これも事実を客観的に書くこと。感想は、単に感じたことなど情緒的なことではなく、SとRの関係から、心理学的に子どもの心の中をどう考えたか、どのように解釈したか、すなわちOについて書くこと。これらのことを、具体的な観察記録の事例をあげて説明した。

観察記録の様式は次のようである。タイトル／子どもの年齢(推定でよい)と性別／状況と行動／感想

②学生たちの観察した子どもと場面

学生たちが観察した子どもは、ほとんどが乳幼児期の年齢であった。また観察場面は、通学時の車内や駅構内、客としてあるいはアルバイトとして出かけたスーパー等の店・飲食店・水族館・名古屋ドーム・図書館・公園・遊園地など。自分の家庭または訪問した家庭での自分の子どもや知人・親戚の子どもなど。これらでは、多くの場合、子どもが単独ではなく、母親または家族と一緒にいる場合が多い。また、療育センター、幼稚園等の特定の障害児にボランティアで定期的に接している場合などもあった。

観察記録を通して、学生たちのアルバイトや生活の一部が分かる面白さもあった。

③子どもの行動を書けないところから出発

この方式の授業は、3つの学年にわたって実施したのだが、いずれも最初提出した観察記録は、全くの期待はずれであった。その主な点は次のようである。

a. 事実の記録と感想を分けて書くことができない

状況と行動には、観察した事実を書き、感想はそれについての感想を書く、という指示をしたが、これが案外難しい。たとえば、子どもの行動の表現に、おもしろそう、かわいそう、など観察者の情緒を入れてしまう。逆に、感想のところ、状況や行動で記述していない別の行動を書いて感想は書かない、などである。

b. 子どもよりも親の行動を書いてしまう

電車内とか買い物場面など、子どもが母親と一緒にいる場面が多いのだが、母親と子どものやりとりを記録するときに、子どもの行動を中心に書かず、母親の行動の流れを中心に書いてしまう。母親については細かく書いても、子どもの行動は至って簡単にしか書かない。

c. 感想に保育者のお説教を書いてしまう

母親の流れを中心に書くものだから、感想として、お母さんはもっと子どもの心を分かってやらなければいけません、とか、保育者は子どもの心を分かってやるように気をつけなければいけません、という調子の建前を、観察場面と無関係に書いてしまう。そして、何も分からないくせに、親の行動に対して、意外と冷ややかで批判的な感想を偉そうに書いている。

d. 子どもの時間のまとまりが見えない

子どもの行動は、子どもなりのまとまりをもっている。これを時間的に見れば、子どもなりの時間のまとまり、時間の区切りをもって、生活している。それが見えないと、行動の記録にならないのだが、それが見えないことが多い。

たとえば、何かしている子どもにそばに行って声をかけたら、びっくりして、母親のほうに走っていった、までしか書いていない。その後、母親の所へ行ってからどうだった、と学生に聞くと、母親にしがみついて、こちらを見ていたと言う。そこまでを書かないと子どもの行動を理解したことにならない、とよく注意した。

また、1つの観察記録に、子どものいろいろな行動を簡単に羅列しているのもあった。子どもの行動で区切らないで、観察者の観察時間を単位にしてまとめてしまったのだ。

学生たちは、子どもの行動を、自分の都合ばかりで観ていて、子どもの動きに合わせて観察して

いない。これでは、保育者として、タイミング良く子どもに働きかけることはできない。

e. 文章が書けない

ワープロで長々とした文章になってしまい、主語述語などがあいまいで、何を言いたいのか読む方に伝わってこないなど、学生によっては、文章がきちんと書けない者がいた。その都度、添削または口頭で文章を直した。

④子どもの行動が面白くなってこない

観察記録を提出して、ていねいにコメントを重ねていっても、たいして記録がよくなってこない学生がいる。何時まで経っても子どもが見えてこないし、子どもの行動が面白くなって来ないのだ。こういう学生を見ていると、知的能力の問題もあるが、それにもまして人格形成に問題があるような気がする。

その特徴は、自我が未成熟で、自分の現実をありのままに受容できず、自分と子どもを区別して、子どもの視点に立って子どもの行動を観ることが苦手である。感想に自分のプロジェクションが出てしまい、子どもが思いつかないような考えや情緒を書いてしまう。

こうした学生は、学習内容よりも評価の方を気にする傾向がある。だから、観察記録も、あれこれ指摘されると、防衛的になり、形式的に文句を言われないように書くことばかり気にして、子どもの心の動きを見ようとししないのだ。

こうした傾向が強い学生が多い学年では、この観察記録の授業は、予定通りには展開できなかった。

⑤子どもの行動が面白くなる

毎週レポートを提出させて、かなり厳しい指導を繰り返していくと、観察記録が分かりやすく書けるようになり、感想もよくなってくる学生がでてくる。

このように、進歩する学生たちは、たいてい子どもの行動を見ることが、面白くなっている。それは、外から見える行動を通して、子どもの心の動きが分かるようになり、どんな子どもの行動もそれなりの必然性があることに気づくからだ。

そして、今まで見過ごしてきた街角で、子ども

がいることに気づき、子どもに目を留めて見るようになったなど、子どもの行動に関心を持つようになってきている。

こうした学生の観察記録は、他の学生にもよい影響を与えて、クラス全体の観察記録のレベルを上げる事に役立っている。教師のコメントよりも、学生同士の刺激の方が教育的効果があるように感じた学年もあった。

⑥概念を子どもの具体的イメージに結びつける

この観察記録の授業をやってみて、保育専攻の学生がこれほど子どもを観察できない状態だとは思っていなかった。実習で子どもを観ているはずなのに、観察記録に言語化できるようには観ていないのだ。それはまた、学生は幼児教育や保育に関する用語や概念を知っていながら、それを子どもの具体的イメージに結びつけることができないことを、物語っている。

だから、いろいろ勉強しても、具体的な保育行動になると、それとは無関係になってしまい、学校で勉強したことは保育行動として役に立たない、ということになるのだ。

観察記録の授業を通して、子どもの行動が面白くなった学生たちは、概念や用語を子どもの具体的行動のイメージに結びつける面白さを経験したのだと思う。

たとえば、アタッチメントについて、テキストで学んでも表面的にしかわからない。実際に母親にまつわりつきながら探索する子どもの行動を観察して、はじめてアタッチメントという概念と子どもの具体的イメージが結びつくのだ。

(3) 修了論文の指導

専攻科保育専攻では、修了要件として、修了論文を課しているが、大学評価・学位授与機構へ学習成果レポートを提出して、教育学士の称号を得させることも、重要である。

私がアドバイザーとして、1年生の授業を担当した学年に関しては、1年生の担当科目の授業のなかで、試行錯誤しながら、修了論文の指導をしてきた。私が1年生のアドバイザーを離れたときに、それまでの経験をまとめて、『学習成果レポー

ト・修了論文作成の手引き』を作成した。また教員に対しても私の経験を伝える文書を配布した。この2つに書いた内容も含めて、修了論文に関して、指導してきたことをまとめておこう。

1) 卒業論文は修了論文のモデルにならない

①修了論文は卒業論文ではない

修了論文中間発表会や審査会の教員たちのコメントを聞いていると、卒業論文、修士論文あるいは学会発表等で、自分がコメントされてきたことが、そのまま出て来ているような場合があった。それでは、それぞれの専門分野で仕込まれてきた研究に固執して、本学の保育専攻の学生を分かってやり、保育者養成として学生を育てる視点が、欠けているような気がする。

私が愛知教育大学で卒業論文を指導したときは、基本的に学会誌等の学術論文がモデルになっていたと思う。だから、はじめのうちは私自身も、学士号取得のための論文ということで、漠然と卒業論文のイメージで修了論文の指導をしてきた。

しかし、学修成果レポート・修了論文では、学修が基本であり、研究は無理な気がする。

②卒業論文が書けるようなカリキュラムではない

保育専攻は修業年限から見ると4年生大学と同じで、修了論文は卒業論文に相当する、と考えがちだが、4年生大学のように、3年生までに文献講読演習、調査実験実習等の基礎的授業を積み上げて、卒業論文を書かせる教育をしていない。

前述のように教育心理学研究の授業で、子どもの観察記録の授業を試みて、修了論文作成に役立つような試みはしてきたが、これでも十分とは言えない。

「文献を読みなさい」という指導をしても、文献の読み方を丁寧に指導する授業を積み上げていないから、文献を読む力は不足したままである学生が多いのだ。

③学生は抽象的思考力に弱い

先に述べたように、保育科のなかで優秀な学生が保育専攻に進学しているとは言えない。

こうした学生たちの知的能力について、かつて、私が翻訳したジェンセンの知能論(1978)から見

ると、反復練習して学習する力はあるが、入力したことを概念にまとめたり変換したりする抽象的思考力は弱いのである。

したがって、本を読んで自分の言葉や文章で要約するという作業は苦手なのだ。だから、いくつかの文献を読んで、それをレビューして、多くの論文から自分が必要な概念を抽象するという作業は、なかなか困難なのだ。つまり著者の文脈にそって文献の概念を理解することも、自分の概念でいろいろな著者の概念を抽象したり比較したりすることも難しい。

また、行動観察をしても、いろいろな行動からある事象を取りだしてまとめる、ということはなかなか困難だ。したがって、現場にたくさん足を運んで、沢山の観察をしても、何を観て何をまとめるのか、分からなくなってしまうことが多い。

抽象的思考力が弱い、ということは、自分が感じていること、自分が考えたこと、などを文章化して他人に伝えることも苦手なのだ。

これは、現在の保育専攻の学生の状態だけではなく、今後入学してくる学生の抽象的思考力も、ますます低下するとみた方がよい。

したがって、抽象的思考力を前提とした論文指導をして、学生には伝わらないと嘆いても、何の進展もないし、解決にもならない。

④情緒的に不安定な学生もいる

保育専攻の学生たちとつきあってみると、すかっとした感じの学生は少数派である。親に認められていないなど家庭の問題、それと密接に関連する自分の能力について自信のない悩みなど、何か情緒的に不安定になるものを抱えている学生が、かなりいる。

そのために、自己評価力が弱く、素直に自分の能力にあったテーマを選び、精一杯に論文と取り組むことができない。つまり、できない自分を受容できず、それを防衛するために、背伸びしたテーマを選び、うまくいかないと身体反応が出てきたりして、論文に手が着かなくなったりする状況をつくりだしてしまうのだ。

修了論文の指導には、いわゆる論文指導だけでなく、こうした学生の人格発達全体に関わる問題も付いてくる。

しかし、この問題は、教員としての指導の枠を越える面もあり、なかなか難しい。解決にはならないが、家族とのことなどいろいろと、私に話してくれるようになった学生は、それなりに論文と取り組むことができた気がする。家族との人間関係に問題がありそうな感じがしても、それに関して防衛的になる学生は、落ち込んで出てこなくなるなど、指導しにくい面があった。

したがって、抽象的思考力が弱い上に、人格的にも問題のある学生に、卒業論文のような学術論文をモデルにした指導は、ますます困難である。

2) 分かることの喜びを経験させたい

このように、カリキュラムや学生の資質を考えると、修了論文に学術論文をモデルにした卒業論文を期待するのは無理だと言うことになる。

では、修了論文で何を目指したらよいか。それは、学生たちがこれまでに知り得た保育に関する諸知識（実は言葉として知っているだけ）が、実際にこういうことなのか、頭だけでなく心身の全体で分かった、という経験をさせることだと思う。言い換えると、意味が分からずに覚えている言葉や概念の、本当の意味を読みとり、言葉や概念を具体的な行動に結びつけて理解する力量をつけることである。

これまでの論文をみると、論文で扱った概念の意味が自分なりに分かって、そこに面白さを感じた学生は、論文を書いて良かったと思い、論文を書くことで成長している。逆に、自分で扱った概念を、自分の言葉で表現できず、具体的イメージとしてつかめなかった学生は、論文を書くのが大変だった、辛かった、ついでにいうなら「岩井先生は厳しかった」と言うことしか残らず、論文を書いたことで、成長していない。こうした学生にとって、論文を書くことは学士号取得の手段に過ぎないのだ。

分かることの喜びを経験させるための指導について、これまで私が指導してきたことを、まとめておこう。

①「やりたいこと」と「できること」は別だ

私は、学生がやりたいと言っても、そんなことは保育専攻の学生には無理だから、やめたほうが

よい、という指導をしてきた。それに対して、学生のやりたいことをやらせたほうがよい、という反論もあると思う。やりたいことをやらせるのが、論文指導として理想だが、現実には、そう単純ではない。

能力の自己評価力が弱い学生は、限られた期間と自分の能力で、どれだけのことができるか、具体的な見通しのないままに、漠然ときわめて情緒的に「やりたいこと」を考えているからだ。

②自分が具体的イメージを持っていないことはやらないほうがよい

マスコミで騒がれたせい、「虐待」をやりたいという学生がよくいた。しかし、週刊誌、新聞、テレビ程度の情報しかない。虐待の問題は、かなり複雑で、マスコミが取りあげるほど簡単なものではない。また、保育専攻の学生が、現実の虐待の事例に接することは不可能に近い。したがって、こうしたテーマに取り組んでも、自分で具体的イメージを持つことはできない。だから、マスコミ程度の結論しかでてこない。それでは、論文を書くことで保育者としての資質を向上させることはできない。

子育て支援、母親の育児不安、早期教育と言った、現代の子育て問題も、学生にとって魅力的テーマのようである。しかし、こうしたテーマは、教育学や心理学だけでなく、政治や経済、あるいは社会構造などについて、幅広い知識や経験があって、分かってくる問題であって、子育ての経験もない学生が、取り組むには、問題が複雑すぎるような気がする。身近によほど都合な事例がない限り、こうしたテーマは無理だと思う。

やはり、保育専攻の学生として、具体的イメージが浮かびやすい問題に取り組んだ方が、面白いし、自分なりの充実感が得られると思う。

③教育学や心理学の専攻学生のやるようなテーマは無理である

最初の頃は、教育、発達、臨床、といった分野のテーマに興味関心をもつ学生が多かった。しかし、保育科や幼児教育科出身の保育専攻学生は、教育学や心理学の専門教育を受けていない。したがって、専門教育の積み上げがないとできないよ

うなテーマは、やりたいと思っても、現実にはできないことが多い。保育専攻の学生ができることは、これらの分野でも、保育に関連したことなのである。

④文献だけで論文をまとめるのは避けた方がよい

これまでの論文のなかで、文献だけで論文をまとめた例があった。いずれも努力した割には、私とそのテーマから描くような具体的イメージが描かれておらず、言葉が浮いており、事柄自体を本人がよく分かっていない、という感じであった。

文献だけで論文を書くには、それぞれの文献から、概念を抽象し、その概念の流れが物語になるように論文を組み立てていく必要がある。そのためには、それだけの専門的学力が必要である。また、いくつかの文献を読んで、それを要約して概念を抽象する力が必要である。

このいずれの能力も、保育専攻学生は、系統的に訓練を受けていないのである。だから、文献だけで論文を書く力量は不足している学生が多い。したがって、文献だけで論文を書くことは、避けた方がよい。

⑤文献と保育現場との往復で論文を書くことを勧める

保育専攻学生が教育学や心理学の専攻学生よりも得意なのは、実習経験が多く、実習以外でも子どもに接した経験があり、幼稚園教諭、保育士の資格をもつ、ということである。したがって、一番得意な資質を活かして、論文を書くことが効率的だと思う。

文献で読んだことを、観察、見学、調査等で確かめてみる。あるいは、保育現場で観察して感じた問題を、文献で調べてみる。こうした研究の進め方を勧めたい。

つまり、頭だけでなく、足も使って、論文を書いたほうがよい。自分の観察、見学、調査等、足を使って得た資料と、頭を使って文献で調べたことを組み合わせて、論文にまとめるのである。

これまでの学生の多くは、こうした方式で論文を作成してきた。保育者の仕事でも、研究的なことをする機会が増えてきた。だから、頭と足の両方を使う訓練をしておいたほうがよい。

文献で読んだことを、実際の保育現場で観察したことに当てはめてみて、「こういうことだったのか」と言うことが分かれば、文献を読むことも楽しくなるし、観察することも楽しくなる。

実際に、学修レポートをまとめた学生は、その後の幼児教育や保育に関する本の読み方が、良くなっているような気がする。

⑥学生たちが足を運んだところ

これまでに、どんなところに足を運んだか、大まかに紹介しておこう。

a. 幼稚園・保育園のクラスを継続的に見る

夏休みや春休みに補助保育者として子どもの保育を担当しながら子どもを観察する。同じクラスの子どもの様子を継続的に観察する、あるいは特定の条件で絵を描かせる、パソコン等の刺激を見せるなど、課題を子どもに与えて観察するなど。

b. 同じ子どもを継続的に観察する

学童保育、統合保育、自閉症児のグループ、あるいは一般の家庭などで、特定の子どもを長期間にわたって観察し、その発達的变化を観察する。リトミック教室での子どもを継続的に観察する。

c. いろいろな保育について見学し観察する

家庭保育、夜間保育、病院保育、幼保一元化、アレルギー児対応の給食など、いろいろな保育の実際を見学し調べてくる。

⑦指導法等の効果等のテーマは避けた方がよい

どういう指導をしたら、鉄棒遊びができるようになるか、いろいろな玩具を与えて、どれが楽しく遊ぶのによいかなど、子どもに何らかの刺激を与えてその効果や優劣をみる、といったテーマも、学生には魅力的である。

しかし、保育に関して、指導法などの優劣や効果など、何を基準に考えるか、とても難しい。また、期間が短くて、指導法の効果をみることはできないことが多い。

学生ができることは、指導法について実際に学ぶことぐらいである。

⑧分かる喜びを経験した例

統合保育に関して修了論文を書いたMの例をあげておこう。

この論文では統合保育に関して、自分の力で読める文献を探してきて、それなりに統合保育における障害児と健常児の相互の発達について学んだ。それにそって、ある障害児の4歳児から5歳児までの発達的变化を、観察してまとめている。ごく普通の教科書的知識を具体的観察で確かめたにすぎないが、できる子とできない子が矛盾を含みながら相互に働き合って発達していく様子と、そこに優れた指導をしている保育者の行動を学び、発達と教育の本質的なことに気づき、自分なりに統合保育が分かったようである。論文を書き上げたときの感想が、特に大変だったことは何にもなかった、ごく自然に書けた、ということだった。

Mの論文は、教科書的知識が自分なりに分かった、ということで終わっている。心理学的解釈や考察もないし、新しい知見を加えることもない。しかし、心理学の基礎学力のない保育専攻の修了論文としては、これで十分だと思う。ここで強調したいのは、自分なりに分かることができたので、論文を楽しく書くことができ、それによって保育者として成長していることなのだ。

3) 学生の資質に応じた指導

①学生の使う言葉は幼児言葉と同じ

教育心理学の授業で、先生のテキストは面白くて分かりやすい、と言っていた学生が、期末試験ではDだったし、授業評価で調べた授業の理解度と期末試験の成績の相関はゼロだった。このように、勉強に関して学生の使う言葉は、額面通り受け取れないことが多い。

保育専攻学生の1年生に「修了論文でやりたいこと」を言わせたり、書かせたりしてきたが、学生の言うことをそのまま聞いて、対応を考えると、とんでもない食い違いに遭遇する。

学生の使う言葉は、こちらが受け取るような概念の背景はなく、まったく違う次元の思いつきや、たまたま身近に転がっていた言葉を言っているに過ぎないことが多い。学生と教員の間、その言葉の共通の概念が形成されていないのだ。学生の言葉を教員の概念で解釈し、あれこれ対応を考え、その問題ならこの先生に相談に行け、などと指導しても、学生は教員の概念とは違うことを考えてたりする。

それは、ちょうど、幼児がめちゃくちゃに言葉を使うのに似ている。それでも、幼児はめちゃくちゃな言葉で大人とのやりとりを、反復くりかえしているうちに、大人の使うような言葉の意味や概念を獲得していく。

学生は、幼児のように急速に発達しないが、それでも反復繰り返していれば、多少は進歩する。だから、教員がもっと時間をかけて、学生の言うことを、反復繰り返して聞いてやり、学生と教員が共通の概念を形成していけば、学生に、自分で気がつく喜びや、自分で分かる経験をさせてやれる気がする。

教員の伝えたい概念が伝わらない、と嘆いたり責めたりしがちだが、教員のほうも学生に合わせる努力が必要だと思う。

②修了論文指導は学生と教員の相互作用

修了論文を指導していると、学生によっては、かなりのエネルギーをかけて指導しても、通じなくて、成果が上がらないことがある。

学生の資質、指導教員の指導力、修了論文の出来、3者の関係を数式で表すと、下記のような。

修了論文の出来 = 指導教員の指導力 × 学生の資質

学生時代から今にいたるまでの観察によると、学生だけでなく大学・短大の教員も自我の未成熟な人が多い。それは、夢見る研究にはプラスになることもあるが、教育や管理運営にはマイナスになることが多い。

たとえば、混乱する学生に手間暇をかけて、筋道をつけて、やっとあるレベルまでにしたところを、発表会などで他の教員からコメントされると、学生に代わって説明したくなったりする。教育の場である発表会で、学生が説明できないことを指導教員が代弁して、誰に何を教育するのか。

上記の式のように、修了論文の出来は、指導教員の指導力だけの問題ではない。だから、修了論文の出来に関して、指導教員は、学生を抱え込んだり、学生と一体感をもつ必要はない。

教員は、できのよい学生とは適度な距離をとりやすい。しかし、手間暇のかかるできの悪い学生とも、適切な教育的距離は保ちたいものである。

効率を考えたら、できの悪い学生はお荷物でし

かないのだが、学生集団全体をみると、統合保育ではないが、そういう学生がそれなりの役割を果たし、学生同士に刺激を与え、教員に手間暇をかけさせて、教員を教育している面もある。

保育専攻の修了論文指導は、学生と教員の相互作用である。だから、指導教員が修了論文を、大変な思いで苦勞して、指導していたのでは、学生が修了論文を書くことに喜びを味わうことは、不可能である。学生にとっても苦痛になってしまう。

指導教員が、学生の指導を楽しみ、学生の遅々とした進歩にも、指導する喜びを感じることで、学生に修了論文を書く喜び、ひいては保育者の保育する喜びを伝える、基本だと思う。

それが、「愛をもって互いに仕えよ」ではないか。

(4) ごまかし勉強からの解放

①永遠を夢見て徒勞に賭ける

本学にきて、内容が分かっていないのに、借り物の立派な言葉や文章を並べている試験の答案やレポートに、たくさんお目にかかった。こうした勉強を、藤沢(2002)は、ごまかし勉強といっている。それは、評価だけを気にした手抜き勉強、間に合わせの勉強、一時しのぎの勉強で、子どもたちの学力低下をもたらしているとして、その弊害について、詳しく調べている。

本学学生の多くは、小中学校時代から、勉強して分かる喜びよりも、勉強して評価される喜びのほうを経験しているようだ。すなわち、多くの学生は、ごまかし勉強を身につけてしまったのだ。

私の授業改善や論文指導の試みは、学生をこのごまかし勉強から解放して、なんとか、学ぶ喜び知る楽しさを経験させるためのものだった。しかし、日暮れて道遠し、である。

教育心理学の試験は、勉強してくるようになったものの、丸暗記が多く、ごまかし勉強の上塗りに過ぎない気もする。

保育専攻の観察記録の授業で何を学んだか、レポートを書かせると、子どもが面白くなった学生は、「子どもの行動を細かく見るようになった」など、自分の変化を書くが、ごまかし勉強の学生は、「子どもの行動を細かく見なければならぬ、

ということが分かりました」と建前を書くだけだ。

ごまかし勉強は、頭の中を通り抜けるだけで、本人は何も学ばないし、何も自分を変えようとしていないのだ。私の調査では、保育に関して聞かれると、自分の行動とは無関係に立派な建前を並べるような、ごまかし勉強をする学生が多い。ごまかそうとするから、評価ばかり気になって、保育者は大変な仕事になってしまうのだ。

ごまかしの勉強をやめれば、子どもが面白くなるし、保育の仕事は喜びになる。こんな簡単なことを分かって欲しい、と思っているいろいろ試みたが、現実にはなかなか学生たちに通じない。

それでも、私が本学の授業や修了論文指導で伝えようとしたことは、いつかどこかで継承されて、永遠に伝わっていくと、私は信じている。私がこう信じるようになったら、学生たちは、大変私の言うことを、よく聞いてくれるようになった。

私は、「永遠を夢見て徒労に賭ける (1998a p. 153)」、と言う言葉が好きだ。そして、それに生きてきたことを幸せに思う。

②ごまかさなくてもイエスは支えてくれる

ごまかし勉強は、単に勉強法の問題ではなく、人間としての生き方の問題である。

2年生後期の保育職論では、子どもの目は絶対にごまかせないから、評価を気にして、よい保育者にみられるよう、背伸びして、ごまかしたって無駄だ。子どもにはみんなばれている。だから、保育者は自分の欠点や弱さをありのままに子どもの前にさらけだして、自分の力でできることを精一杯やればよい、そうすれば、何にも困ることも、恐れることもない、と論じている。

そして、うまくいかなくて悩み悲しむときは、自分の存在を肯定してくれる人に支えてもらいなさい、そして、人だけでは支えられないときには、人を超えた存在であるイエスに祈りなさい、ごまかさなくて心を開けば、イエスはあなたのすべてを受け容れ、慰めてくれるのだ、と伝えている。

この授業では、私の祈りの実感を伝えるために、讃美歌「いつくしみ深き」と高田三郎作詞作曲の「来なさい重荷を負うもの」(大塚 2002 p.98)を学生と一緒に唱っている。

ごまかさなくて生きよ、と伝える保育職論で、

出席日数の足りない学生を切ったら、なんとかならないかと圧力をかけられた。ルール違反の学生に、ごまかして生きることを教えるのが、本学が誇りとする「愛をもって仕えよ」だろうか。

最後に、ごまかし勉強からの解放を求めて様々な試みを楽しませてくれた学生たちに感謝したい。また、身体のみならず私を励まして、勤めを続けさせてくれた教職員の皆さんにお礼を述べたい。

そして、次の聖句を通して、心身共に疲れ果てた私を慰めてくれた、イエスに感謝の祈りを捧げたい。

凡て労する者、重荷を負ふ者、われに來たれ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑くければ、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。我が軛は易く、わが荷は軽ければなり

マタイによる福音書 11 章 28-30 (文語訳)

文 献

藤沢伸介 2002『ごまかし勉強上』『ごまかし勉強下』新曜社。

岩井勇児 1983『教師の心理』福村出版。

岩井勇児 1998a『子どもと喜び悲しむ心理学 個性と社会性の矛盾とその発達』三恵社

岩井勇児 1998b 保育科・幼児教育科学生による授業評価—無記名・記名、自己評定・他者評定、成績等からの検討—名古屋柳城短期大学研究紀要, 20, 71-89。

岩井勇児 1999 保育科学生のクラスの雰囲気と授業評価 名古屋柳城短期大学研究紀要, 21, 63-73。

岩井勇児 2000 保育科学生の保育者観の形成 名古屋柳城短期大学研究紀要, 22, 137-149。

岩井勇児 2001 保育科学生の保育者観の形成 (続報) 名古屋柳城短期大学研究紀要, 23, 183-194。

岩井勇児 2002 建学の精神「愛をもって仕えよ」に関する学生の意識 名古屋柳城短期大学研究紀要, 24, 197-213。

岩井勇児 2003 保育者効力感と親からの自立 名古屋柳城短期大学研究紀要, 24, 157-170。

ジェンセン A.R. (岩井勇児監訳) 1978『IQの遺伝と教育』黎明書房。

大塚野百合 2002『讃美歌・唱歌ものがたり』創元社

Improvement of Instruction and Teaching Completion Theses

Iwai, Yuji*

本学で試行錯誤した授業改善と修了論文指導について報告する。授業改善においては、評価だけを気にして学習内容に関心を示さない、学生たちのごまかし勉強を改善するために、あれこれ工夫した。修了論文指導に関しては、学生たちの資質にあった指導をくふうした。

保育科の教育心理学においては、まず受講態度の訓練をし、授業時の基本的マナーを厳しくしつけ、学生として学び成長する訓練をした。さらに、授業を、テキストの黙読→内容の解説→小テストの実施、次の時間に小テスト返却・講評、という毎時間小テストを実施する方法で行い、それなりの成果をあげた。

保育専攻の教育心理学研究においては、学校で学ぶ保育に関する諸概念・用語を子どもの具体的イメージに結びつけて理解ができるように、毎週、子どもの具体的行動を観察し、それを観察記録に文章化し感想を加えたレポートを提出させ、それに基づいて授業を行った。子どもの行動が細かく見えるようになり、子どもが面白くなる訓練になった。

修了論文の指導に関しては、抽象的思考力に弱い学生たちに、保育の現場に足を運んで、観察、見学、面接等具体的資料を得て、それと文献を参照させて論文を書く、という指導をした。その指導に関する経験を整理してまとめた。

キーワード：ごまかし勉強, 授業改善, 小テスト方式, 観察記録, 論文指導